

『ニューギニアへの道』(一)

—— 経過報告に代えて ——

近 藤 嘉 彦

グリーンランドに次ぐ世界オニの大島ニューギニアが未だ暗黒のまま残されているとは以外なことである。日本の現状の如く猫の額のような土地を営々と耕やし、そこにきゅうきゅうと生活していることを考えてみる時、不思議なものさえ感ずるであろう。併し、現実にはニューギニアは未開のまま取り残され、そしてこの世に存在しているのである。

さて、この様に大きな島で未開のまま残されているニューギニアとはどのようなところであろうか。それはオーストラリア北方、南緯5度を中心に東西に長く伸びた島で、世界の気候区の分類上、熱帯雨林気候に属する。しかし、中央部には4千米級の高峰が密集し、山岳気候を示している。行政的に見るならば、オニ次大戦まではオランダ・イギリス・ドイツにより統治されていたが、今次大戦後は西半分はオランダに、東半分の南部をオーストラリアに、北部はオーストラリア信託統治にそれぞれ統治されることとなっている。ニューギニアの概説は、人文科学の専門書に任せることにして、我々は西半分の蘭領ニューギニアへ、学術探検をやってみたいと考えたのである。以下に、その中間報告とでも言うべき経過を書きつけることにする。

昨年10月18日、探検部内にもたれている西ニューギニア研究会企画のオランダ領西ニューギニア探検隊派遣計画書が学生課を通して、小野学生部長に手渡された。現在小野学生部長、矢口学長或いは理事会にて審議され、間もなく正式報告が加藤探検部長のもとにもたらされることと思う。

さて、探検部にオランダ領西ニューギニア探検の話がもち上ったのは昭和34年12月のことであつた。以下計画書提出迄の概略を記しておきたい。

今回の探検は当研究会所属の読売新聞社文化部日野忠男記者によってもち込まれた。早速部内で検討の上実行に移すことが決議された。時期は昭和35年5月から2ヶ月間と決め、部員の東奔西走が始まった。折悪しくメンバーで今回の探検隊の隊長でもある横田教授が沖縄調査団々長として沖縄へ出発され、計画推進の大黒柱が抜けた感じとなった。しかし日野記者の盡力により計画書が出来上り、

募金による資金集めに取りかかるところまで漕ぎつけた。横田教授が探検隊派遣に一番重要な時期である四月一ぱい沖縄に滞在という真に不幸な事態に陥ったため、計画は一時中断の止むなきに至った。海外に出るということは、一入自分の事のみで終ることなく、他人の力に與るところが大きい。教授は4月15日に帰国後、挨拶廻りやその他雑用に追われ、計画に十分な参加が出来なかった。又派遣準備が進むにつれて、色々な諸事態が判明し、経験或いは準備不足が痛感された。こういった事情でオノ回の探検隊派遣計画は失敗に帰した。

探検部の部員である限り、一度は海外に出たい。探検部の今後の発展のためにも、一度は海外に探検隊を派遣させたいという考え方が支配的であった。この観点から今年の四月末役員改選により現役員が就任して、同様オランダ領西ニューギニア探検隊派遣計画を継続させることにした。又部内で断続的に遂行していても実績は上らない。そこで西ニューギニア研究会が発足し、毎月定例研究会が開催されるようになった。研究会では西ニューギニアに関する諸事情の聴講と文献の収集に主眼が置かれ、平行して計画書の作成、現地との連絡、派遣への準備等が行われた。ニューギニアへ行った人達からの報告を聞くにつれ、現実の酷しさを認識するに至った。又学校の性質から考えても同様な準備を整えなければ、私達の計画に賛同が得られないであろう。日本のオランダ領事館は柔に拒否をばめかして来た。この時、航空丑騒事件にからんで、オランダ、インドシナ、日本の間に微妙な国際情勢が介入して来て、我々の計画遂行上非常な困難をきたした。再度翌年の5月出発をめざして努力して来た部員には大きなショックであった。それにも拘らず、横田教授を中心に地道な活動を続けて来た研究会は、耳よりな話を聞き込んだ。前々から知ってはいたが、材木関係の一業者が度々ニューギニアに配船しているという事実を知ったことは大きな収穫であった。早速連絡をとり、横田教授を初め3名が上京した。話はとんとん拍子に進み、10月下旬に読売テレビ放送株式会社勤務、関西大学探検部OBの山本善孝氏と私が行くことに決った。しかし、先の国際問題が解決せず、遂に無期延期となった。二ここに現地を偵察するという夢は破れ去ったのである。

この間、終始好意的な態度で接してくれたのはKLMオランダ航空の人々であった。ピアクにある同社からも親切な手紙と共に、若干の資料も送っていただいた。又同大阪支社ヘルフラッハ支配人も積極的な援助を申し出ていただき、オランダ本国との交渉も引き受けて下さった。我々は同社の人達に感謝の念を禁じえない。探検隊派遣に関して、西ニューギニア総督府の態度は孚者らしい半面を見せてくれた。国際政治の緊迫している時期にも拘らず我々の計画に深い興味を示

し、今後、積極的な援助を手えてくれるであろうことは想像に難くない。

起で、本計画の具体的内容は、才1回の計画を母体としているが、研究の進んだ現在、前回の計画では実行不可能な案は取り止めた。又、明治大学アラスカ綜合学術調査団を模範対象として、計画書の实例を取り入れた部分もある。そしてその実際は提出された書類が示す通りである。

今回の計画書で改めた主な部分は西部のマノワリ、ファクファク等における調査を省いたことである。日本で5万分の1の地図を地図を見訓れてい我々は、ヒマラヤやその他、未開発地域の不完全な地図を読みとる技術にたけていなかったたのである。又国内飛行機の利用が我々の考えていた程簡単なものではなかったことも原因している。この点を改めさせたのは信州大学鈴木誠教授である。同教授の体験から僅かの距離でも意外に日数と労力を要するという。ここで我々は、西部地域を省きナパン、ナビレ地区の中央部を集中的にとりつくことにした。現地からの連絡に依り土民の労力及びカヌー等の水上交通を利用してもナパンからナビレ迄相当の日数が必要とされる。そこで休養日数も入れて2ヶ月の大半をナパン・ナビレ地区に費やすことにした。後は杉原助教や緒方医博が目的とするウイルセル湖を中心に生物学班が活動する。ウイルセルメレンからはナッサウ大山脈の連山脈、ギャラバンを連ねて約1週間の行程である。併し現地を見た人から聞くところによれば、山々の南面と平地とは数百米もの岸壁でさえざられているという。南からこの山脈にとりつくのは難しいと思われるが、西或いは北からのルートは未だ明らかにされていない。従って我々としては余力があればウイルセルメレンから西に道を求めてナッサウ山脈の西端にあるニューギニアオサの高峰イーデンアルク・トップへ到達するルートを偵察したい。充分な装備とクーリーを備えるだけの資金があれば我々のパーティでも同峰登頂は不可能ではないと思われる。

以上が今回計画された探検隊の人類学班、生物学班の行動日程の予定であり、変更された理由でもある。この他に特に設営部門を設けてみた。簡単なキャンプ設営なら隊員にも出来るが、上記偵察をも兼ねた装備の研究となると忙しい隊員には支障をきたす結果が生じないとも限らない。そのため装備梱包一切から熟達に於ける山岳技術や装備、イーデンアルク・トップの偵察等に専念出来る様にした。これは昭和33年に大阪国立博物館と読売新聞社が共同で行ったニューカレドニア探検隊に参加した日野記者及び緒方隊員の経験による要望でもある。幸いにして部内には山岳部に在籍してその方面の知識に長けている部員が2、3人は居る。OBの竹本氏や現部員の米川君を中心にして今後の準備を進めてゆき

たいと考えている。

海外遠征で一番問題となるのは査証と資金である。後者は学校の行事となれば部員の微力を振うまでもなく、学校側の意向通り運ばれることになるであろうから問題は無いものと思われる。従って前者即ち査証が最大の関心事となる。我々の場合ビザは全然見通しがついていない。オランダ本国の意志がそのまま日本にある領事館の回答となる。このケースで行けば、オランダ領事館の表現は次の如く本国の考え方とも受取れる。

「1959年にオランダ探検隊が既にナパン、ナビル地区を調査したから、今更日本隊が調査隊を派遣する必要はない。またどうしても知りたければ我々がその資料を提供してもよい。」しかし我々はこれを最初に誰もが直面する単なる外交辞令と解釈した。その内に出しておいた各地からの手紙の返事が舞い込んできた。前述したようにオランダ領ニューギニア総督府からの待望の手紙は先の外交官の文章と異なり行間から暖か味が感じ取れた。早速詳細な報告を寄せたことであつた。横田教授や加藤先生と相談の末計画書の英訳がよいのではないかということになり、その旨連絡した。だが今に至るも英訳が完成していないのは我々の怠慢とは云え申し分ないと考えている。

附 記

昭和35年11月9日に行われた学部長会議の席上、既に提出してあったオランダ領西ニューギニア探検隊の計画が審議され、その学術的意義が認められて、我々の意願であつた該計画が採用され、将来実行に移される可能性が濃厚になってきた。又翌日の文学部教授会に於ても採り上げられ、実施される時には、全学掲げての遠行が決議されたことは我々の意を強くした。かくて関西大学西ニューギニア探検隊の原型は出来上つたが、今後に残された課題は大きく、我々の双肩にその責任はいよいよ重くのし掛つて来たことは辞めない。出発が決定するまで我々は責任ある言動をとると共に、より一層切磋琢磨し、研究に専念しなければならないと、ファイトを燃やすものである。

註

井上義男著 「大ニューギニアの相貌」 興文社 昭・17年刊
世界ノン・フィクション全集 4

I・F・チャンピオン著 三吉明十訳
「ニューギニア探検記」 筑摩書房刊 昭・35年刊

これらの文献は今回の探検には大いに参考になるものと思われる。

ニューギニアに関する文献

• ニューギニア研究会調べ •

- ニューギニア地名集成
南洋経済研究会編
東京 丸善 昭和18年 156頁

H.3
2
12
- 大ニューギニアの相貌
井上義男
東京 興文社 昭和17年 304頁

H.3
12
1
- 蘭領ニューギニア及モルソカス諸島
南洋協会台湾支部編
編者 (発行者)
南洋叢書オ37巻
台北 大正13年 63頁

H.3
12
10
- ニューギニアの自然と民族
太平洋協会編
東京 日本評論社 昭和18年 682頁
太平洋全集オ7巻

H.3
12
16
- 蘭領ニューギニア事情
拓務省拓務局編
海外拓殖事業調査資料 オ31輯
東京 編者 昭11年 89頁

H.3
12
7
- 豪洲委任統治領ニューギニア事情
拓務省拓務局編
海外拓殖事業調査資料 オ39輯
東京 編者 昭13年 93頁

H.3
12
9
- ニューギニア事情・パプア領地
「コロール島(パラオ)」
南洋庁長官々房調査課編
南洋庁調査課資料 オ2輯 昭14年4月

297.38
N48
1-1